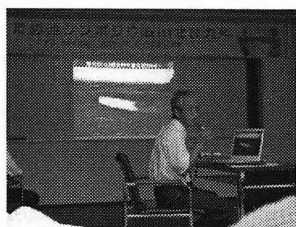


第4回ため池シンポジウム in 北部九州の報告

大内秀之*

一昨年愛知で開催したため池シンポジウムも第4回をむかえた。今年は8月7～8日、福岡大学で行われた。参加者が初日50数名、二日目30名ほどと少なかったのがやや残念であったが、中味は良かった。第1日目は基調講演や「ため池・疎水を語る」をテーマとした一般講演、第2日目がエクスカージョンであった。以下、プログラムにそって簡単に報告する。

1. 基調講演は福岡市教育委員会の吉留秀敏氏による「弥生時代の貯水施設とため池の出現」。発掘の現場から見えて来た、貯水施設や、ため池について報告であった。ため池の出現は、狭山池に代表されるように、これまで7世紀説が優勢であったが、福岡市内の元岡・桑原遺跡群(伊都国)から渡来人の指導の下に造られたと考えられる弥生時代後期の国内最古のため池(貯水遺構)が発見され、池の辺では祭事も行なわれていたことが明らかになったとのこと。ため池が、弥生時代の後期(3世紀)には造られていたとのこと驚いた。



考古学者・吉留秀敏氏

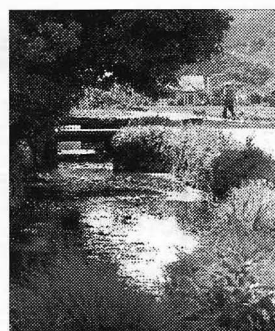


元岡発掘現場



発掘品

2. 「裂田溝(さくたのうなで：福岡県那珂川町)」(福岡大学 渡辺亮一准教授) は、灌漑のため、神功皇后が博多湾に注ぐ那珂川に堰を設け、5 Kmほどの水路(溝)を造らせたと日本書紀にある歴史的現役の疎水であるが、水環境整備事業で景観は変わり、魚類も24種から8種に減ったとのこと。歴史的価値や生態系への評価不足が残念である。ため池に限らず、その価値を関係者に正しく認識していただくための努力の大切さを改めて感じた。



整備前の裂田溝

3. 「韓人池(福岡県大野城市)」(大野城市ふるさと文化財課 石木秀氏) は、日本書紀(応神天皇紀)に出て来る渡来人が造ったとされるため池。もともとの規模が小さかったこともあり、その存在を知る人は殆どいないとのこと。行政サイドとしても、市民への啓発や、保全活動が必要だ

※NPO「カエルの分校」

と思いました。

4. 「薦(こも)池と下毛原(しもげばる)台地の大溝(大分県中津市)」(大分県埋蔵文化財センター 村上久和氏) は、7世紀の遺跡から見えて来るものとして、古代人と水との関係を報告。薦池(御済池)の堤体や下毛原台地の大溝(井路)は「敷葉工法」が採られていて、渡来人の指導の下に造られたと考えられているとのこと。古代より、より良い生活のために、水利施設を造っていたことが解った。それにしても、北部九州は遺跡が多く、その研究も盛んであると感じた。

5. 「武雄のため池(佐賀県武雄市)」(土地改良区 井上氏) は、保養村のため池(池の内湖)などを、市民グループと一緒に、池干しや、外来魚駆除、清掃などの取り組みをしていることを報告。ため池の維持管理(清掃、池干しなど)に、地域や市民が農家に協力しているところがあることに安堵した。今後はこれらの全国的拡大の一翼を、ため池の自然研究会も担ってはと思った。

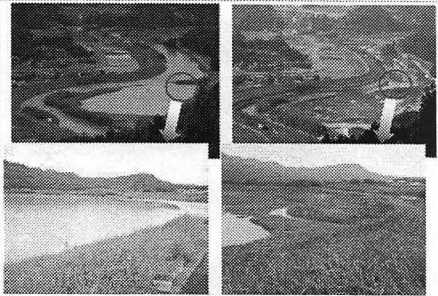
6. 「ひょうたん池(中牟田池:福岡市西区)」(ひょうたん池花クラブ) は、湧水池(ひょうたん池)の水草を取り除き、きれいな水面を取り戻し、周囲に花を植え、休憩舎やベンチ、デッキなどを造り、地元町民の憩いの場所として自然との共生を図っている。ただ、数年前放たれたブラックバスのためか、在来魚が減り、トンボも消え、再び水草が増えて、ヘドロも溜り異臭もするようになったので、県にお願いして池干しをしてバス退治をしてもらった。水草は自分たちで取り除くようにしている。そんな努力が報われて、2008年に県の「快適な環境スポット30」に選ばれたと報告。価値観の違いが、自然の残るため池を楽しむだけのため池に変えてしまった事例だった。多くの住民がボランティアで参加しているだけに、歴史ある湧水池であることや、自然の生態系や景観などについても、その価値を知っていたならと悔やまれる。今回の事例の場合、当事者は良かれと思って実行しているだけに残念。ヘドロがなぜ増えたか? トンボがなぜ消えたか? それらへの花クラブの活動の影響についても、考えられるようになってほしいものである。行政や専門家の方々は、ため池に限らず、その価値を、関係者に正しく認識していただくための努力の大切さを改めて感じた。住民要望だからと、安易に税金を投入する怖さの一つだと思う。

7. 「兵庫からの報告」(兵庫県立大学 岡田教授) は、いなみのミュウジウムと、初回シンポ以降の動きを報告。

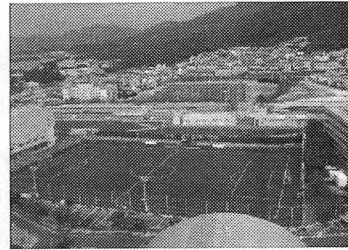
8. 「愛知からの報告」(東大愛知演習林 蔵治講師) は、2007年のシンポ以降の動きとして、三好池の親水化工事が、景観と水辺の生態系が損なわれ税金の無駄遣いになると、市民意識の高まりで凍結されたことなどを報告。これまでのため池シンポジウムの積み上げは、このシンポジウムを実りあるものにし、より良いため池を後世に残していく行くためにも必要なことだと思う。そういった点でも、奈良の参加を呼びかけていただけたら良かったと提起し、次回以降は、過去の開催県をお呼びしようとなったが、その歯止めは?

9. 「アザメの瀬の試み (旧佐賀県松浦郡相知町、現唐津市)」(NPO アザメの会 久我理事長)は、国土交通省による新しい治水事業の報告。松浦川の洪水対策として、堤防に代わり遊水方式を計画し、アザメの瀬地区の水田を氾濫原としての機能を持つ湿地に再生し、洪水対策と共に、自然の再生を図った。結果、かつての生物が戻り、伝統の漁法や、こどもたちの川遊びも復活するなど、人と自然のつながりが出て来た。アザメの瀬の自然再生事業の特徴は、普通種を対象としていること、徹底した住民参加の手法をとったこと、評価に公募型の研究を行ったこと、地域にアザメの会が生まれ、自然再生への協力と、人と自然のふれあいのための活動をしていることであった。

今回のシンポで一番興味を魅かれた事例であった。その第一は、河川の洪水対策を堤防強化ではなく遊水方式としたことと、氾濫原を自然再生のための湿地としたことで自然が戻って来たことであった。また、田んぼを再生させたり、子どもたちや住民が利用できる簡素な建物を作っていること、魚道を造っていることなどであった。その効果が上っていることを翌日現地を確認した。



アザメの瀬の改修工事結果
(左；洪水時 右：平常時)



見えないため池(福岡大サッカーグラウンド)

10. 「堀川の現在～未来 (北九州八幡西区)」(北九州市五平太の会 中村恭子氏)は、市街地を流れる運河の歴史と浄化の取組みの話。江戸時代初めに、治水・灌漑・舟運のために着工されたが、藩財政悪化などで中断され、約100年後に工事再開し、延べ184年の歳月をかけ洞海湾まで続く約12kmの堀川の工事は終了。明治期に入り、筑豊の石炭運搬の大動脈として利用されたが、鉄道などの発達に伴い、1935年頃、水運の使命を終えた。その後周辺の市街化に伴い、ヘドロとゴミの川になってしまい、埋立ての話も出た。一方、一部市民や学生がその浄化のための活動に取り組んでいる。名古屋の堀川も似たような生い立ちと問題があるので、連携されてはと感じた。

11. 番外編「見えないため池 (福岡大サッカーグラウンド)」(福岡大学 渡辺亮一准教授)は、断面構造を変えることで、保水性・浸透性をアップした土壌と、人体に優しい新型の人工芝を併用したサッカー場を新規に開発し、雨水を一時的に貯留して、洪水緩和と、ヒートアイランド現象の緩和に効果を上げているという報告。都市型洪水対策と、ヒートアイランド現象の緩和に期待出来、おもしろいと感じた。

12. 第2日目（バスツアー）2コース設定されていたが、人員少のため1コースはマイカーに変更。その結果、バス組は中身が充実。主だった関係者がすべて同じバスに乗り合わせ、車窓から見える遺跡や、ため池、疎水などの話を聞くことが出来た。ただ、参加者が少なかったのが残念であった。コースは、元岡発掘現場(福岡市)→産宮神社(前原市)→伊都国歴史博物館(前原市)→アザメの瀬(旧相知町)。アザメの瀬は、今回の参加で、一番学ぶことが多かった。

アザメの瀬については、下記サイトの「松浦川におけるアザメの瀬自然再生計画」（九州地整武雄河川事務所調査課 大塚健司）参照。ちなみに、アザメの瀬の自然再生事業を計画・推進したのは、今回のため池シンポジウムの実行責任者でもあった九州大学大学院の島谷幸宏教授で、当時は、国土交通省武雄河川事務所長。 <http://www.mlit.go.jp/chosahokoku/h15giken/pdf/0134.pdf>